

アートによる地域貢献を目的とする「坂出人工土地アート展（仮称）」 の企画・実施

Planning and implementation of "Sakaide Artificial Land Art Exhibition (tentative name)" with the aim of contributing to the community through art

かわい ひろゆき 芸術工学部ビジュアルデザイン学科 教授
戸矢崎 満雄 芸術工学部アート・クラフト学科 教授
藤山 哲朗 芸術工学部環境デザイン学科 教授
中山 玲佳 芸術工学部アート・クラフト学科 助教
尹 智博 芸術工学部環境デザイン学科 助教

Hiroyuki KAWAI Department of Visual Design, School of Arts and Design, Professor
Mitsuo TOYAZAKI Department of Arts and Crafts, School of Arts and Design, Professor
Tetsuro FIJUYAMA Department of Environmental Design, School of Arts and Design, Professor
Reika NAKAYAMA Department of Arts and Crafts, School of Arts and Design, Professor
Jibak YOON Department of Environmental Design, School of Arts and Design, Professor

要旨

2013年に開催された瀬戸内国際芸術祭以来、沙弥島および瀬居島で培ってきた地域とアートの関わりのノウハウを応用し、市の中心部でのアートによる地域貢献の可能性を模索した。

研究のポイントは以下の5つである。

①地元の連携強化 ②伝統文化・特産品の発掘・発見 ③作品コンセプトの設定 ④住民有志・地元作家との協働 ⑤市街地での企画展

①は、坂出駅前の商店街との連携を強化した。②は、地元の行事に参加するなど、科研「与島五島における伝統文化の持続的継承と発展に関する基礎研究」と並行して取り組んだ。③は、アート展の会場から発想するユニークなコンセプトが設定された。④と⑤は、瀬戸内国際芸術祭の枠組みでは実現できなかった試みである。④は、地元作家たちとの協働が実現した。⑤は、当初予定していた坂出人工土地は叶わなかったが駅前商店街に会場を借りることができた。企画展は、前半1ヶ月を地元作家が主催し（冬会期）、後半2ヶ月弱を私たちが主催する（春会期）こととなり、統一テーマを設定し作家が交流した。あいにく、春会期は新型コロナウイルスの影響で延期となったが、本研究の成果として、地元作家と協働できたことと駅前商店街でアート展が開催できたことは大きな成果と考える。

Summary

Since the Setouchi Triennale held in 2013, we have applied the know-how on the relationship between the region and art cultivated in Shamijima and Seijima, and explored the possibility of regional contribution by art in the center of the city.

The points of research are the following five.

① Strengthening local cooperation ② Discovering and discovering traditional culture and special products ③ Setting the concept of the work ④ Collaboration with volunteers and local artists ⑤ Special exhibition in the city

① strengthened cooperation with the shopping district in front of Sakaide Station. ② participated in local events and worked in parallel with Kaken "Basic research on the sustainable succession and development of traditional culture in Yoshima Goto". For ③, a unique concept was set, which was conceived from the venue of the art exhibition. ④ and ⑤ are attempts that could not be realized within the framework of the Setouchi Triennale. In ④, collaboration with local writers was realized. In ⑤, the originally planned Sakaide artificial land did not come true, but we were able to rent a venue in the station square shopping district.

The first half of the exhibition will be hosted by a local artist (winter session), and the second half will be hosted by us (spring session), and the artists will interact with each other by setting a unified theme. Unfortunately, the spring session was postponed due to the influence of the new coronavirus, but as a result of this research, we think that the fact that we were able to collaborate with local artists and that we were able to hold an art exhibition in the station square shopping district are major achievements.

◎研究目的

本学と坂出市は2013年から瀬戸内国際芸術祭に参加し、芸術祭のコンセプトである「地域と協働してアート作品をつくることで島を元気にする」を体現してきた。

本研究は、本学の芸術祭参加メンバーが培ってきた「地域と協働することで活力を生む」ノウハウを市の中心部に応用し、いわゆるシャッター商店街をアートにより活性化させる可能性を探ることを目的とした。

◎研究の背景

瀬戸内国際芸術祭における坂出市の会場は沙弥島であり、芸術祭が行われる12の島の中では、埋め立てのために、唯一車でいける会場であるという特色を持つ(図1)。そのことは来場者にとっては便利で都合のいいことであるが、反面、市の中心部を自家用車やバスで通過してしまうという、市にとってはデメリットでもあった。



図1 沙弥島・瀬居島と坂出駅

芸術祭実行委員会と日銀高松支店の発表によれば、2019年に行われた芸術祭は春会期31日間、夏会期38日間、秋会期38日間の計107日間開催され117万8484人が訪れたという。沙弥島は春会期のみで開催のため春会期で比較すると、総来場者数38万6909人のうち、一番多かったのが直島で9万6699人。次が沙弥島の7万2459人で、3位の小豆島5万6766人を大きくリ

ードしている。

また、経済波及効果は180億円とされ、地域活性化の観点からも、芸術祭の果たす役割は大きいといわざるを得ない。芸術祭実行委員会が作品展示エリアの住民1445名を対象に行ったアンケートでは、「地域活性化に役立ったと思いますか」という問いに対して「大いに役立った」が34.4%(487人)、「少しは役立った」が39.0%(552人)で、73.4%の住民が役立ったと解答している。

こうしたことからわかるように、坂出市(行政)および地元住民のアートに対する理解と期待は非常に高い。

一方、坂出駅前の商店街はシャッターが閉まったままの空き店舗が目立ち、活力のある店舗は皆無に等しい。人の流れは、郊外の大型店や隣接する高松市に向かってしまい、このままではますます衰退してしまう。

そこで、私たちが瀬戸内国際芸術祭で培ってきたノウハウを市の中心部に応用することで、商店街に人を呼び賑わいを創出することができると考えた。

◎研究内容

1. アート展の会場について

瀬居島で行った瀬戸内国際芸術祭2019 県内連携事業「神戸芸術大学アートプロジェクト」の搬出が終了した6月15日に、市の中心部にある坂出人工土地とそれに隣接する駅前商店街の視察を行った。当初、建築的にも魅力的で価値のある坂出人工土地を本研究におけるアート展の候補地としていたが、当該建物は予想以上に荒廃していた。表通りに面する部分にも空き店舗があり、内側のテナントはほとんどが空いていて、一時的に建設現場の仮事務所に使われているといった状態であった。

加えて、テナント部分の他に市が所有する部分と個人所有の部分の権利関係が複雑であるため、現状を総合的に判断して、アート展の会場を駅前商店街に求めることとした。

商店街の視察で住民の憩いの場「みなとまちカフェ」

に立ち寄った際、カフェを運営するシニアライオンズクラブ幹事の出田泰三氏と知り合うことができた。出田氏は私たちの研究の趣旨に賛同し、地元作家の集まりである「坂出アートプロジェクト」代表の平野祐一氏を紹介してくれることになった。後に、平野氏もグループ展の会場を探していることがわかり、商店街の中に候補店舗をいくつかピックアップしてくれることになった。

7月27日に、私たち研究メンバー全員と出田氏、平野氏、商店街代表として角谷氏、地元作家の古川氏と「みなとまちカフェ」で会い、私たちからは「地元作家のみなさんと積極的に交流したい」旨を伝え、相互に協力しながらそれぞれの企画展を実施することが決まった。

その後、全員で、会場の候補を4~5件見て回った。美容室、古民家、敷島温泉旅館、空き倉庫などどれも魅力的だったが、重厚感のあるレトロな2階建てビルである高松信用金庫旧坂出支店は、内部空間も天井が高く展示に向いており、全員一致でここをアート展の会場にすることが決まった(図2)(写真1)(写真2)。

日程については、平野氏は11月ぐらいに開催したい意向だったが、準備期間も含めて検討することになった。

なお、この時点でアート展以外の活性化案として、①中・高・大学生が運営する「リサイクル・ショップ」、②アートワークショップで制作する「商店街の手書きイラスト看板」、③商店街限定「アーティストTシャツ」、④中・高・大学生が運営する「ネットTV局」、⑤坂出在住の外国人による「インターナショナルお茶会」、⑥坂出有名店の協力による「坂出有名店 自慢の味食べ歩き」、⑦学生による「各店の目玉商品開発」の7つのプロジェクトを提案した(写真3)。

2.アート展の内容

高松信用金庫旧坂出支店は、長い間地域に密着し、商店街を経済面で支援し、時代の盛衰の変化を見つめてきた。このことから、商店街の未来を考えることと



図2 坂出駅前商店街(グリーン色の線がアーケード街)



写真1 高松信金旧坂出支店(右) みなとまちカフェ(左)



写真2 高松信金の金庫室内



写真3 提案した企画案

信金(Thinking)をかけて、アート展のコンセプトは「アートで考える」とした。キャッチフレーズは「金庫から考える!」、アート展のタイトルは「しんきんぐ of ART」とした。

日程は、坂出アートプロジェクト主催の冬会期は2020年2月1日(土)~3月1日(日)の土・日・祝日の19日間、続いて神戸芸術工科大学アートプロジェクト(本研究メンバー)主催の春会期は2020年3月14日(土)~5月6日(水・祝)の土・日・祝日の21日間と決めた。

参加作家は、冬会期は坂出アートプロジェクトの作家が11名+1団体(平野祐一、上野あづさ、津村ユキヲ、ルカ・ロマ、田村久留美、倉石文雄、古川守一、松尾真由美、モーリエール瞳、長野由美、なみえ、坂出商業高校写真部)。神戸芸術工科大学アートプロジェクトからは、戸矢崎満雄、藤山哲朗、中山玲佳の3名が参加した(写真4)(写真5)。



写真4 しんきんぐ of ART 展 冬会期チラシ(表裏)



写真5 冬会期 オープニングセレモニー

春会期は、神戸芸術工科大学アートプロジェクトが5名(戸矢崎満雄、かわいひろゆき、藤山哲朗、中山玲佳、尹智博)。坂出アートプロジェクトから8名(上野あづさ、津村ユキヲ、ルカ・ロマ、田村久留美、倉石文雄、古川守一、モーリエール瞳、なみえ)が、参加する予定であった(写真6)(写真7)。

※春会期は、作品制作はもとより広報チラシも配布し終わり搬出入の準備などすべてが整った2月末に新型コロナウイルスの問題が発生し、地元商店街や坂出市にぎわい室(瀬戸内国際芸術祭の市の窓口)とも協議し、夏まで延期することとした。



写真6 しんきんぐ of ART 展 春会期チラシ(表)



写真7 しんきんぐ of ART 展 春会期チラシ(裏)

◎まとめ

本研究の、「7月までに坂出市民、地元作家、市民団体、企業、行政から本研究に賛同する人を募り(途中省略)2020年3月に1回目の「坂出人工土地アート展(仮称)」(2週間を予定)を開催する」という計画は、ほぼ達成された。

地元作家の集まりである坂出アートプロジェクトと連携できたことは、それぞれが主催するアート展の規模を拡大し作品に厚みを出すことができた。加えて、アート展のコンセプトやタイトルを統一し、冬会期、春会期という告知の仕方をする中で、それぞれに主催としての主体性を保ちつつ、対外的には1つの企画展と認識できることで、商店街活性化のプロジェクトとしてより効果的にアピールできた。

会場は、当初計画していた坂出人工土地から駅前商店街に変更したが、商店街連合組合の増田氏をはじめ各商店街の代表者の理解を得ることができたため、今後の連携に期待が持てる結果となった。

市民団体は、シニアライオンズクラブ幹事の出田氏とのつながりに加えて、氏が運営する「みなとまちカフェ」で坂出市文芸協会の多田羅氏らとつながることができた。

企業は、今回は高松信用金庫坂出支店長の落合恵旨氏の力添えで、高松信用金庫の全面的な協力を仰ぐことができた。

行政は、今回の企画展は神戸芸術工科大学アートプロジェクトが主催ということで、市のにぎわい室はあくまでも後押しという体制であったが、さまざまな形で支えていただいた。

残念ながら私たちが主催する春会期は延期せざるを得なかったが、坂出アートプロジェクトが主催する冬会期は最終日まで実施することができた。来場者は初日2月1日(土)90人、2日(日)67人、8日(土)46人、9日(日)48人、11日(火・祝)35人、15日(土)32人、16日(日)34人、22日(土)53人、23日(日)73人、24日(月・祝)82人、29日(土)17人、3月1日(日)44人で、合計621人であった。

この数字を、アートによる地域貢献という観点からどう判断するかはむずかしい。地方の駅前シャッター商店街にあって人の動きを少し変えることができたとも見られるし、地域活性には及ばなかったとも見られる。しかし少なくとも、今までなかったようなさまざまな連携が実現したことで、商店街のこれからの一石を投じることができたという大きな手応えを感じている。

今後の課題としては、各作家の作品制作に地域住民が参加することでアートの楽しさを五感を通して実感してもらおうという、私たちが瀬戸内国際芸術祭で得たもっとも特徴的なノウハウを実践する新たなステップが見えてきた。

また、瀬戸内国際芸術祭では、アートと食と旅(とくに宿泊をとまなう旅)を組み合わせることで、来場者に複合的な非日常の体験を提供している。地元の食材を使った伝統料理や創作料理を味わい、伝統文化や風習をテーマとするアート作品を巡る旅は、会場となる12の島ごとに異なる趣がある。

都会と地方という図式の中で一緒くたに見られていた地方の独自性・多様性が地域ごとに輝き始めている。

新型コロナウイルスの影響で私たちの価値観や行動は大きく変わろうとしているが、そのような状況だからこそ、地方の独自性・多様性に焦点をあてた瀬戸内国際芸術祭の提供しているものは、いままで以上に意味を持つのではないだろうか。

こうしたことを踏まえて、「アート+食+プチ旅」の非日常体験を地方の商店街で継続して展開することは非常に有効であると考えられる。